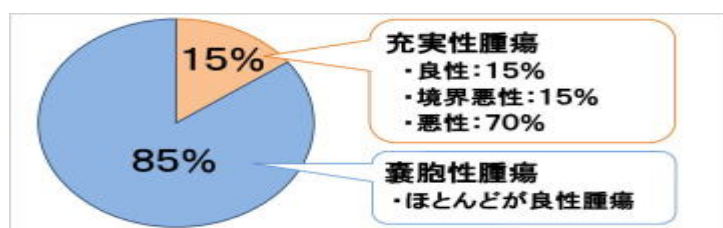


# 卵巣腫瘍

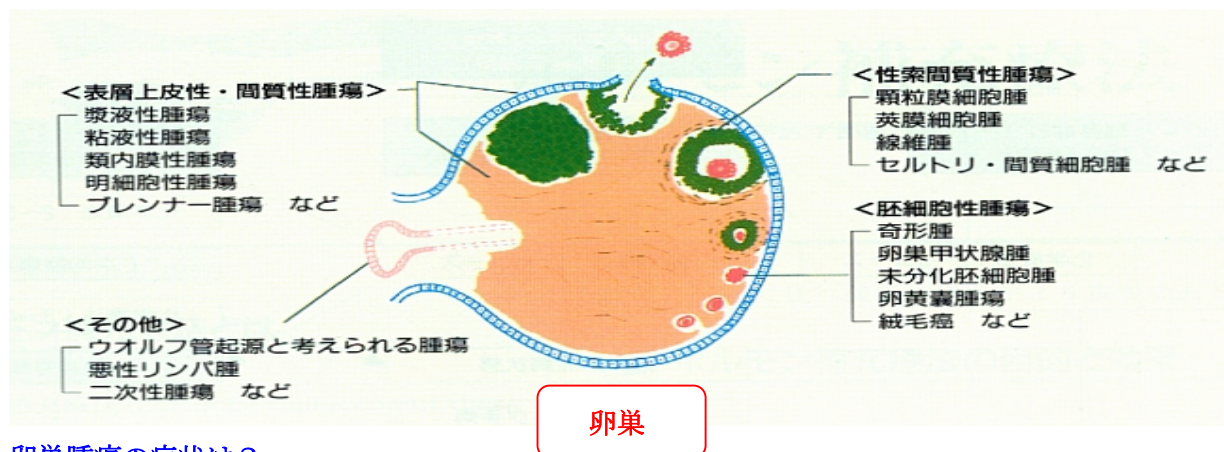
大泉 NewsPaperNo.21(2008.10.1 発行)

卵巣の表面は一層の円柱上皮に覆われ、その内側には神経や血管、大小の卵胞や黄体が存在します。卵巣腫瘍は表面や内層の組織から発生し、良性・悪性・境界型などに分類されます。腫瘍が、もっとも多くできる部位は卵巣表面の「上皮」です。次に卵子の元となる「胚細胞」、稀に「卵胞」にできることもあります。卵巣にできる腫瘍の85%は良性（多い腫瘍は卵巣のう腫）です。しかし悪性腫瘍も年々増えてきています。

卵巣癌は婦人科癌のなかでも、もっとも死亡率が高い疾患です。日本でも近年増加傾向にあり、罹患率・死亡率共に過去20年で倍増し、現在も増加し続けていると言われています。



- ・ 卵巣は細胞分裂が盛んであり、多種類の腫瘍が発生し、その起源により図のように分類されます。



## 卵巣腫瘍の症状は？

腫瘍が進行するまではほとんど症状はありません。その理由として、卵巣は外界との連絡がなく、卵巣内で発生した出血などが症状として出現しないこと、卵巣は両側性に存在するため、一側が腫瘍によって機能しなくなっても、もう一側の卵巣が健常であれば代償性に機能しホルモン異常をきたさないことなどが挙げられます。

腫瘍が大きくなるにつれて、下腹部の腫瘤感や腹部膨隆を認め、圧迫症状が出現するようになります。膀胱を圧迫すれば頻尿、直腸を圧迫すれば便秘などを認めます。腫瘍が捻転した場合には、突発的な下腹部の激痛が出現します。通常は月経異常や不正出血などは認めません。

## 続発症状は？

茎捻転、腹水、胸水、出血、化膿、癒着、破裂、穿孔、悪性化（最初は良性腫瘍であったものの中から悪性病変が発生すること）

## 診断方法は？

### ① 一般的診察法

問診・視診・打診・触診・内診（大きさ、硬度をはじめ、表面の性状、可動性の制限について）  
外診（腹水の貯留やリンパ節の腫大の有無）

卵巣性のものかどうか腫瘍発生臓器の鑑別、次いで良性、悪性の鑑別を行います。

## ② 画像診断法

経膈超音波・・・もっとも手軽に行え、約1cmの大きさから発見することができます。腫瘍の確認、良・悪性の推定をします。腫瘍が充実性の腫瘍の場合、約85%が悪性であると言われています。

MR I・・・内容液の性状評価を含め、腫瘍の性状評価に有力な検査です。

CT・・・良性卵巣腫瘍の成熟嚢胞性奇形種に特徴的な脂肪や歯・骨などを診断するのに有用です。悪性腫瘍ではリンパ節への転移を評価するのに不可欠です。

## ③ 血液検査

卵巣癌では腫瘍マーカーは極めて有用で、CA125が高値を示す場合は卵巣癌である可能性が非常に高いと言えます。(良性疾患である子宮内膜症、子宮腺筋症でも高値を示すことがあります。)

### 良性卵巣腫瘍の治療法

良性と考えられても、直径が5cm以上、腹痛などの症状を呈する場合は手術が考慮されます。また、定期的な検診(超音波、腫瘍マーカー)で悪性化が疑われる場合も手術が考慮されます。

術式は、卵巣腫瘍摘出術・卵巣摘出術・付属器(卵巣、卵管)摘除術のいずれかが選択されます。

### 【卵巣癌】

卵巣癌とは、主に卵巣の上皮性の悪性腫瘍をいい、更年期以降に好発します。日本では年々増加の一途をたどっており、1988年には女性10万人に7.4人の罹患率でしたが、2015年には10万人に10.2人に達すると考えられています。

その発生原因は不明で、初期症状に乏しく早期発見が困難なため、進行癌として発見されることが多く、婦人科悪性腫瘍の中で、もっとも死亡率の高い腫瘍です。症状もあまりなく静かに進行する病気ですので「サイレント・キラー」と呼ばれています。

早期発見には定期的な超音波検査を行うことが必要です。

### 卵巣癌のリスクファクター

排卵回数が多い事がリスク・ファクターとなります。表層上皮や卵巣間質は排卵毎に破綻と再生を繰り返しているからではないかと考えられています。具体的には、晩婚化・少子化で妊娠・出産の機会が少なくなったことや、不妊などがあげられます。女性の結婚年齢が上昇し「絶え間のない排卵」状態を有する女性が増加するにつれて、卵巣癌の発生が今後もさらに増加することが予測されます。他に、食生活の欧米化、糖尿病、喫煙(1日15本以上)、肥満、遺伝などがあげられます。

一方、経口避妊薬の使用は卵巣癌のリスクを低下させます。

### 卵巣癌の治療

手術療法と化学療法を組み合わせで行われます。

子宮、両側付属器、大網、虫垂などを摘除し、さらに骨盤内および傍大動脈リンパ節を郭清します。補助・併用療法として化学療法を行います。

健診として、超音波検査を定期的に受けることをお勧めします。

「自分の誕生日」など、忘れない日を決めて  
子宮がん検診と経膈超音波検査を一緒に受けましょう。